構成メンバーは、伝統医家京都賀川家の門人、当時の新進気鋭京都府医学校出身者、それに検定医らであった。産科学を学生に教える傍ら、開業医の彼等は自家で体験した多くの珍しい症例を相互交換し、互いに研究し合った。しかし最終的には、既に本邦で名を成していた京都府医学校の教諭、高山尚平、足立健三郎、外国から豊富な知識を持ち帰った佐伯理一郎・大月文をかつぎ出して、結果「京都産科婦人科会」の結成と開花させた。翌年、高山・足立・佐伯・大月らは大阪の緒方正清らと結束し、「関西産科婦人科学会」を発足させている。全国レベルでのこの学会を、ある意味においてプロモートしたのは、実はこの小さな地方専門医会「京都産科婦人科会」ではなかろうかと考察する。

（京都市）

緒方正清と産婦人科学史

石原　力

緒方正清（一八六四―一九一九）は、産婦人科医としてもすぐれた業績をあげ、また大阪府・市医師会長として医政面でも活躍した浪花医界の重鎮であったが、さらに医史学の領域でも、特に『日本婦人科学史』及び『日本産科学史』の大著をのこすなど、多大の貢献をなしている。今回は医史学者緒方正清の学問的成長における産婦人科学史を跡付けてみたいと思う。

緒方正清の産婦人科学史研究は、一八八四年（明治一七）に始まるようである。すなわち『日本婦人科学史』及び『日本産科学史』の年表によると、この年、「緒方正清、日本産科沿革考を公にす」と記されており、ときに正清二〇歳、香川県の高松医学校を卒業後、東京大学医学部別課に在学中のことであった。これについては富士川游も、『日本婦人科学史』の序で、「緒方正清君ハ現下、我邦医

史学者ノ一人ニシテ、壮時東京大学医学部ニ生徒タリシ時ヨリ既ニ医史ノ研究ニ手ヲ著ケ」と記している。『日本産科学史』の緒言には、みずから「明治十七年の頃より二三医史の考証をなし」と述べていることからも、これ以前にさかのぼることはまずないであろう。そこで、この『日本産科沿革考』は、かれの日本産科婦人科学史研究の出発点として注目されるのであるが、遺憾ながらまだ私は実見しえないでいる。恐らくその内容は簡単な考証的論文で、後の著書の中に収められているであろうが、それよりも青年時代のかれの歴史についての考え方が記載されているのではないかなど、興味がもたれるところである。

その二年後、明治一九年には『日本産科年代考』を発表している。これもまだ実見の機をえないが、『日本産科学史』の緒言には、「十九年に至りて日本産科年代考と云へる標題の下に、本邦神祇時代に於ける助産術に就き聊卑見を公にしたるを出発点とし」とあることから、その内容は『日本産科学史』の第一編『神代の助産学』の記事に類するものではないかと考えられる。

次に日本の産婦人科学史を西欧に紹介したものとして、一八九一（明治二四）年欧州留学中にドイツ・フライブルクの Verlag von Hch Epstein から出版した四六頁ばかりの《Beitrag zur Geschichte der Geburtshülfe in Japan》がある。これによりかれはフライブルク大学から、ドクトル・メディチーネの学位を得た。かれより前に、日本の産婦人科学についてドイツへ紹介したものとしては、シーボルト、三宅秀、ウェルニッヒ、ショイベなどがあるが、緒方正清のこの著書は、富士川游の《Geschichte der Medizin in Japan》（一九一一年）とともによく引用される所である。緒方自身は本書を『日本産科学史の補説』と訳し、その内容を『日本産科学史』のなかでも紹介しているが、時代を古代と近代の二章に分け、古代では産屋の建造、鎮帯の起源、臍帯剪断法、後産の処置等、近代では賀川玄悦による進歩、その後裔や門弟の意見と方式、明治になってからの発達、日本婦人の骨盤、皮膚色素、嬰児の頭蓋などについて述べている。

欧州より帰国後、二二年間医史学領域での著述はない。これは産婦人科医として、診療や病院経営に多忙であったためである。しかしその間、明治三二（一八九九）年頃富士

川游と共著で日本婦人科史の編纂を約束したが果たさず、また廓嘉四郎とも計画したが遂行できなかったと『日本婦人科学史』の序に記していることからすれば、医史学に対する情熱を失ったのではなかった。大正二(一九一三)年『医海時報』の明治医史中に日本産科婦人科の発達を執筆した。

そしてこれが契機となり、小野利教の援助を得て、ようやく大正三年完成したのが『日本婦人科学史』であった。これは和綴で上下二巻に分れ、四二八頁、通俗書を目指したもので、産事、習俗、鎮帯、儀式、育児、賀川流産科、女科書と産科器具といったような項目を立てて、歴史上の事項を記載するという方式であった。

次いで専門的な史書『日本産科学史』の執筆にかかった。令孫緒方正美博士によれば、大正六年二月からで、六年末から七年正月にかけては九州へ出かけて資料の蒐集につとめたといわれる。山田玉川が文を修し、緒方がこれを校正するという仕方で進め、大正八(一九一九)年三月校了し、八月二十日夜その病床に届けられた、本文一、八一〇頁の大冊『日本産科学史』を眺めて歓びの笑を残し、二日後の二十二日逝去した。この書物、したがって産科婦人科学史は、緒方正清五十五年の生涯をかけた文字通りのライフ・ワークとなったのである。

(虎の門病院産婦人科)